ラジオ放送

＜平成27年1月～3月放送分＞

ON AIR

金光教の声

No.410

もくじ ～*contents*

＜先生のおはなし＞

☞ 金光教の先生のお話です。

●年頭放送　**戦後７０年を迎えて**
金光教教務総長　岡成敏正　*page 1*

●**朝の祈り**
金光教阪急塚口教会　古瀬真一　*page 6*

●**もったいなくて**
金光教稗島教会　高島　保　*page 10*

●**受け方上手**
金光教邑久教会　小林　眞　*page 14*

●**運命を変える**
金光教サクラメント教会　大矢　嘉　*page 18*

●**足が痛い！**
金光教豊橋教会　安達吉浩　*page 22*

●**感謝の拍手**
金光教名張教会　近藤佐枝子　*page 26*

●**神様のつけた道**
金光教平野教会　宮下寿美　*page 31*

●**あきらめないで**
金光教室積教会　河合久子　*page 35*

●**誰もがもっている神様の心**
金光教気仙沼教会　奥原美紀子　*page 39*

●**父の匂いの中で**
金光教川西教会　平本光司　*page 44*

●**娘の真心**
金光教中野教会　河井真弓　*page 48*

《年頭放送》

「戦後七十年を迎えて」

金光教教務総長　岡成敏正

皆様、あけましておめでとうございます。共々に今日の命を頂いて、平成二十七年の新春をお迎え出来ましたことを、心よりお慶び申し上げます。

本年は、第二次世界大戦が終結して七十年を迎えます。日本はすでに戦後生まれの人が八割になったと聞いておりますが、終戦までの日本は、明治の後半から、およそ十年ごとに戦争を繰り返してきました。そのような国が、戦争をしない国としての歩みを進め、大きな経済発展を遂げ、世界各地への支援、貢献が出来るまでにならせて頂いております。

それは、先人たちが、着る物も、食べる物も、住まいもままならない中で、戦争による計り知れない犠牲への反省を土台にして平和を祈り、努力されてきた賜であります。そう思いますと、今に生きる者として、そのご苦労に敬意と感謝を持たずにはいられません。

そのような豊かさや便利さ、快適さという恩恵を受け続けている一方で、社会はいつしか、人間中心、経済中心ということが当たり前になっているようにも思います。青少年を取り巻く痛ましい事件や、高齢者をねらった悪質な犯罪、中高年の自死や無縁社会と言われる現実を見るたびに、私たち人間は、何か大切なものを見失ってはいないだろうかと思わせられます。改め

て、私たちに恵みを与えて下さる天地自然への畏敬の念や、人と人とが助け合って生きるという関係が築かれていくことを大切にしていきたいと思うのです。

さらに、世界に目を向けますと、地球規模の環境破壊が進み、富める者が弱い立場にある人々を支配し、様々な格差や人命が軽視される状況を生み出しています。また、国家や民族間で利害や思想が対立し、万物の霊長と言われる人間同士が傷つけ合い、命を奪い合うことが、今も繰り返されています。

そのような、現実に心が痛むのは私だけではないと思います。私は、それぞれの人や国同士が助かり立ち行く平和な世界が開かれていくことを日々祈らせて頂きながら、私自身が平和を築く確かな一人にならせて頂きたいと願わずにいられません。

そのような思いがありますから、周囲の人との触れ合いを大切にしておられる方々を見ると、ありがたい気持ちになります。また、困っている人に自分から声を掛けて助けようとされる姿や、困難に出遭った時に、励まし合い、力を合わせて乗り越えようとされる方々の姿に触れますと、言い知れぬ感動を覚えるのであります。

そして、そうした人間が人間らしく生きていくための原点は、やはり、家庭だと思わせられるのであります。

金光教の教祖金光大神様の教えの中に、次のようなお話があります。

「ある人が子供の数が多く、それぞれ性格が違うので困っているとお願いした。金光様はその人に、**『五本の指が、もし、みな同じ長さでそろっていては、物をつかむことができない。長いのや短いのがあるので、物がつかめる。それぞれ性格が違うので、お役に立てるのである』**と教えられた」

このお話は、「子どもが多く、それぞれの性格が違うから困る」と思っている親御さんに対して、子どもさんたちを五本の指に例えて、「一人ひとりの性格が違うからこそお役に立てるのだ」と、むしろ喜ばしいことだと教えられているのです。

子どもが、自分のお父さんやお母さんから、人との違いを指摘されて叱られるばかりでは生きづらくなります。反対に、「あなたは、お兄ちゃんやお姉ちゃんとは違うものを持っている。だから、あなたにしか出来ないようなお役に立つことがあるよ」と言われれば、自分も認められているのだという気持ちになり、それが、生きる力ともなります。そういう触れ合いは、人間の可能性を伸ばす力となり、世のお役に立

つ元にもなると思います。さらに、人を大切にしていく心を育てます。これは、夫婦の関係作りから始まることでもあると思います。

ですから、このお話は、人が人として生きる上で大切なことを教えられているのだと思えてなりません。つまり、「違いがあるからこそお役に立てる」という見方は、人と人、人と万物の関係を生かすだけでなく、国と国との平和な関係作りにも通じるものだと思います。

誰もが、誰かのお役に立つ力を与えられています。人に喜ばれると、いのちが輝きます。それは、人間は皆、天地の恩恵によって生かされ、人間を始め、万物を生かし、育くもうとする天地の親神様の心を頂き続けているからであります。

そのことを金光大神様は、人は皆**「神のいとし子」**と教えられました。人は皆「神の子」だからこそ、誰もが天地のような心になることが出来るし、その心を育むことによって助かり立ち行く世界が開かれてくる、とお示し下さったのです。

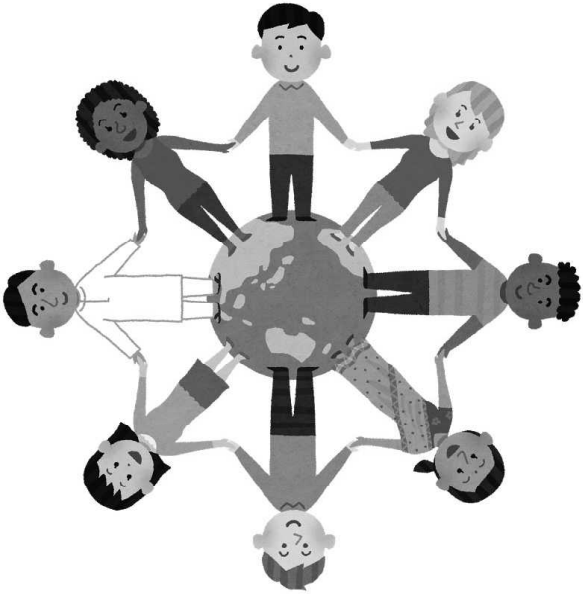
金光教の前の教主・金光鑑太郎様は、次のお歌をお詠みになりました。

「世話になるすべてに礼をいふこころ
平和生み出すこころといはん」

人を傷つけ合うのも人間の心からであれば、生きる知恵を出し合い、平和に生きることが出

来るのも人間の心からです。一つひとつの家庭が平和な生き方を育んでいけば、その一人ひとりが世界の平和につながる尊い存在となります。

どうか、お互いが「神の子」として生きることに心を込めていく、すなわち、人間同士が天地のような大きな心を育てる一年となりますことを、心より祈っております。



《先生のおはなし》

「朝の祈り」

金光教阪急塚口教会　古瀬真一

「おはようございます。今日はいいお天気になりましたね」

私は、教会の近くの道路をお掃除しながら、行き交う人たちと、こんな朝のあいさつを交わすのを、密かな楽しみにしています。

私が奉仕している金光教の教会は、大阪と神戸を結ぶ私鉄の駅に近い住宅街にあります。片側二車線の県道に面しており、朝、お掃除をしていると、駅へ向かう通勤、通学の人たち、散歩やジョギングをする人たちなど、大勢の方々と出会います。

この朝の道路のお掃除は、日課のようになっていて、既に亡くなって久しい祖母や、何人ものご信者さんたちによって、私が子どものころから続いています。私は、十数年前から取り組み始めました。私が取り組み始めた当初は、ごく限られた範囲だけをお掃除していましたが、目の前のゴミを奇麗にしても、また次のゴミが目に入るので、いつの間にかその範囲は、教会を挟んで南北に二百メートルほどの区間にまで広がりました。近くのお店や、ご近所の方たちも、もちろん美しい町内を保つよう、いつも心を配っておられますが、多くの車が走り、大勢の人が行き来しますから、全くゴミがないという日は、残念ながらないのが現実です。

面白いもので、捨てられているゴミにも季節

感が現れていて、例えば、おでんの器や風邪予防のマスクから冬の訪れを、また、空(から)になったペットボトルやアイスキャンディーの棒から夏が近いことを感じたりもするのです。

今では、楽しみでさえあるこのお掃除、取り組み始めたばかりのころは、実はそうではありませんでした。無造作に路上に捨てられたタバコの吸い殻や空き缶、食べ散らかされたファストフードなどをちり取りに掃き集めながら、「こんなところにポイポイと、物を捨てるなんて許せない」という怒りの感情が湧いて来て、心が波立ってしまう有り様でした。

それでも、奇麗になった街角に、すがすがしい朝の日射しが差し込んで輝くのを目にすると、「ああ、させてもらって良かったなあ」「踏みしめる大地に、少しでもお礼が出来たかな」というように、少しずつ、喜びややりがい、意味を見付け出せるようになっていきました。

七～八年ほど前の初夏のことです。私の心に深く刻み込まれた出会いがありました。

ある朝、いつものようにお掃除をしていた私は、県道の信号機の根元に、奇麗な花束が、お供えしてあるのに気が付きました。翌日も、その翌日も、花は、その場所を慈しんで微笑みかけるように美しく咲き続けていました。けれども、日を重ねるにつれ、次第にそのみずみずしさは失われていきます。

「ああ、少し痛んできたなあ。でも、もう一日は大丈夫かな…」「もう一日」「もう一日…」というように、大切な人への祈りが込められた

その花束を片付けることが出来ないまま、何日かが過ぎていきました。

随分痛んでしまった花束を見て、「さすがに今日は、片付けなくてはならないな…」と、私が心を決めたその朝、一台の車が、すっと目の前に止まりました。そして、四十歳ぐらいの男性が降りて来て、花束を片付けられたのです。

私が、「おはようございます」とあいさつすると、その男性は、「息子を、この交差点での交通事故で亡くしました。近くに住んでいましたが、実は、この土地を離れることになりました。子どもが亡くなった後、家庭もうまくいかなくなり、離婚したのです。もうここで暮らすのはつらいのです。だから、この現場に来てお参りするのは、きっと最後になると思います」と、一言一言を絞り出すかのように、静かに話をされたのでした。

私は、その男性に、「この場所は、これからも出来る限り奇麗にしておきますから。お元気で」と、精いっぱいの心を込めて伝えたのでした。そして、遠ざかっていく男性の車を見送りながら、ここで亡くなったお子さんや、男性のこと、また、別れた奥さんの身の上を、祈らずにはおれませんでした。

昨日と少しも変わらない、静かな朝でしたが、穏やかに見えるこの町にも、思い掛けない出来事に遭い、人知れず深い悲しみや苦しみを抱えて暮らしておられる方がいらっしゃるということを、神様から突きつけられた朝でもありました。

この日以来、私はこれまでにも増して、道路を行き交う人たちの幸せや、悲しみ苦しみからの助かり、そして、日々の暮らしが立ち行くことを祈りながら、お掃除に取り組むようになりました。

朝、言葉を交わす顔見知りの方も、次第に増えてきました。八十歳手前くらいの男性は、「今日も、生かして頂いてありがたいねえ。年を取ると、『ああ、今朝も目が覚めたなあ』って思うんですよ。眠っている間に何かあってもおかしくないのに、『今日も命があって、目が覚めた。ありがたいなあ…』って、心の底から喜びがあふれ出て来るんですよ…」と、その眼を少し潤ませながら、朝を迎えた喜びを、私に聞かせて下さいました。

この放送が流れる朝も、きっと私は、いつものようにお掃除をしていることでしょう。お掃除しながら心の中で、「神様ありがとうございます。大空には陽が昇り、踏みしめる大地は豊かな恵みをもたらしてくれています。今日も私は、命を授かり、生かされて、生きています。体も心も元気です。どうぞ、授かった今日の日が、皆さんにとって、素敵な一日になりますように…」と祈りながら。

《先生のおはなし》

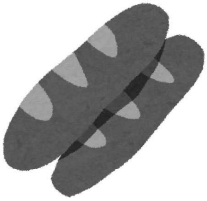
「もったいなくて」

金光教稗島教会　高島　保

高校を卒業した娘が、パン屋さんでアルバイトを始めた時のことです。私は、娘が閉店時間まで働いた日に限って、妙に元気がないことに気付きました。

パン屋さんの勤務時間は朝六時から夜十一時までの交代制で、仕込みの補助作業から出来上がったパンの陳列、袋詰め、レジ打ちまで、大忙しの毎日です。娘は初めてのアルバイトで、さすがに夜遅くまで働いた日は疲れるのだろう、と初めのころはそう思っていました。

しかし、娘には高校のクラブ活動で培った忍耐力や精神力があるはずです。娘の元気のない様子を何日も見ているうちに、私は何か別の理由があるのではないかと考えました。



ある日、娘から話を聞くと、「捨てられるパンがもったいなくて」と言います。そのパン屋さんでは、閉店時間が過ぎると売れ残ったパンを捨てる作業があるのですが、まだ食べられるはずのパンがごみのように扱われるのに、娘は違和感を覚えたのです。それもただ廃棄するだけではなく、パンをぐちゃぐちゃに踏みつぶしてからごみ袋に入れて捨てる作業です。わざわ

ざこんなことをする理由は、第三者に廃棄したパンをごみ袋から盗られないようにするためだとか…。

娘は、高校のクラブ活動で食べたパンのことを思い出しました。早朝練習の前に、「今日も頑張ろう」と、みんなを元気にしてくれたパン。しかし、このような目に遭って、パンが可哀想で仕方がありません。

お店のパンを作る職人さんは朝三時までに調理室に入り、パンの仕込みを始めます。仕事はとてもハードで、ほとんどが力仕事と立ち仕事です。パン職人さんはこのパンをおいしく食べてもらいたいのであって、初めから捨てられると思ってパンを焼いてはいないのです。捨てるということは、こうした思いをも一緒に捨てるということになります。

娘は、出来上がったパンを陳列する度に、「このパンを食べてくれる人に出会えますように」と、神様にお願いすることしか出来ませんでした。

私は小さいころから、「もったいない」とよく親に言われて育ってきました。水道水の出しっ放しや、電気の付けっ放しはもちろんのこと、食後のお茶わんにご飯粒が付いているだけでも、「もったいない」と叱られたものです。

考えてみると、世界中で水道の蛇口から直接水が飲める国はごくわずかしかありません。その水が無くなってしまうと、私たちの生活は成り立ちません。ところが、限られた貴重な資源を、普段意識せずに無駄遣いしていることにあ

まり気付いていないのです。

一粒のご飯にも、天地の恵みと収穫した人々の大変なご苦労が込められています。全ての物を大切にする心、食べ物のいのちを粗末にしない心、食べ物を作って下さった方への感謝の気持ちを大切にすることを、私たちの世代の多くは親から教えられてきました。

商業化された現代社会においては、この「もったいない」という心を失った世代の人が増えつつあります。親から教えられてきた目に見えない心の教育を、若い世代や子どもたちに伝えていけたら、というのが私の願いです。

さて、話はパン屋さんのアルバイトに戻りますが、この店には娘の高校のクラブ活動で仲間だった恵子さんという人も一緒に働いていました。勤務は交替制のため、娘は閉店までの勤務が何日も続く一方、友達の恵子さんは朝六時からの勤務です。

それなのに恵子さんは夜の閉店時間にお店に来てパンを買っていきます。次の日も、また次の日も毎晩です。特にこの店では残ったパンを割引することはありません。朝から長時間置かれたパンであることは恵子さんが一番よく知っているはず。それなのに、なぜ売れ残ったパンを毎晩買いに来るのか不思議です。娘は思い切って聞いてみました。

「どうして閉店間際にパンを買いに来るの？」

「捨てられるパンがもったいなくて」

恵子さんも娘と同じ思いでした。恵子さんは、閉店時間が過ぎるとごみのように捨てられてい

くパンを見るに見かねて、閉店間際に毎晩パンを買いに来ていたのです。

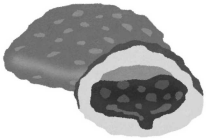
捨てるのが当たり前になっている世の中に流されずに、「もったいなくて」の精神でとった恵子さんの行動は、社会にとって小さな一滴に過ぎないかもしれません。しかし、一人ひとりが出来ることは小さなことでも、一つのパンのいのちも粗末にしない行動は、とても尊いことだと感じました。

娘と恵子さんが通っていた高校は、金光教関係の学校でした。食事を頂く時には、「食べ物は、人の命のために天地の神様が作り与えて下さったものですから、有り難く頂く心を忘れてはいけませんよ」と教えてもらいました。

私たちは、天地の神様のお働きによって出来る食物を日々頂いています。神様のお恵みなくしては、何一つ作ることは出来ません。肉や魚、パンや野菜も、皆、掛け替えのないいのちなのです。生きていることへの感謝の心を忘れてはなりません。

娘は、このことを通して、天地の働きの中で生かされて生きている私たちであるということを学び、神様の働きを人に伝えたいと、金光教の教師の道へ進みました。

また、友達の恵子さんは、食物を粗末にしたくない思いで、食品関係の会社で働いています。



《先生のおはなし》

「受け方上手」

金光教邑久教会　小林（こばやし）　眞（まこと）

おかげさまで、ただ今六十四歳、シルバー世代の仲間入りまで後わずかになりました。よく自分の顔を見ると、しわだらけなのに、困ったことに気分はまだ三十五歳くらいなのです。本音を言うと三十と言いたいところなのですが、長男から、「お父さん、いくら何でも息子の歳よりも若いというのは、いかがなものかと思うけど」とのクレームがあり、少し気を遣うことにしたのです。

お互い自分のことは客観的に見ることが出来ません。大抵の人は多分私と同じで、「実年齢よりも自分は若い」つもりでいるはずです。

だから、こんなことが起こったのでしょうか。

月に一、二度、所用で岡山から、と言っても兵庫県に近いところですが、大阪へ行くようになって十五年になりました。交通手段は専ら電車です。居眠りしていてもお酒を飲んでいても、本を読んでいても、じっと座席に座っているだけで目的地に着くのですから、こんなに便利なものはありません。

いつも利用している電車は、行きも帰りも一部の区間を除いて大抵満員です。乗客のほとんどは通勤、通学の人ばかり。最近になってやっと気付いたのですが、通勤、通学の人ばかりということは、私は、乗客の中ではすでに最高齢の部類に属していたのです。

それなのに私はずっと、電車に乗ると、いつも席を譲ることばかりに気を取られていました。ところがそれは、今となっては勘違いもいいところでした。実はもう、逆に席を譲られてもおかしくない側の人間になっていたのです。

それは暑い一日のことでした。その日もまた、大阪から姫路に向かう帰りの快速電車は、いつものように仕事で疲れた乗客でいっぱいでした。

運よく四人掛けの座席の一つが確保出来た私は、ボーっと車内の様子を見るとはなしに眺めていました。途中の駅で座席が空いても、我先に、と言った感じで、すぐにその席は埋まります。誰もがみんな、出来れば座席が欲しいのです。

最近では、スマートフォンでゲームを楽しむ人が増え、両手で操作する方がやりやすいのか、以前にも増して座席を欲しがる人が増えたような気がします。またゲームに夢中になって、周りのことなど我関せず、といった感じで、座席を譲る場面にあまり出くわしたことがありません。

ちょうどそんなことを考えていた時です。神戸駅で乗り込んだある中年の女性が、すぐ横に立ったのです。するとすぐに、向かいの座席に座っていた女子高校生らしき女の子が席を立って、「どうぞ」の声と共に、その女性に席を譲ったのです。ところが、その女性の反応はこうだったのです。

「大丈夫です、次で降りますから」。そう答

えると、何事もなかったかのように立っているのです。

その女性の歳は多分私と同じくらい。私から見ればまだ十分若いのですが、残念なことに、若い人から見ると間違いなくおばさんです。いくら自分は若いと自己申告しても、それは無理というものです。

女子高生はすでに席を立っています。もうおいそれと席に戻ることなんて出来っこありません。いつもならすぐに埋まる座席ですが、この席だけは特別です。事の成り行きを見ていた人には手出しの出来ない、特別な座席なのです。

満員電車の中で、ポツンと一つ空いたままになった座席は、その周りにおかしな空気を醸し出していました。

だからと言って、その中年女性が別に悪いことをしたわけではありません。素直に自分の気持ちを答えただけなのです。

この出来事は、私にとって、決してひとごとではありませんでした。もし、自分がその中年女性だったら、一体どんな反応をしていたでしょうか。「ありがとう」と、素直にその女子高生の好意を受け入れていたでしょうか。

この誰にも座ってもらえない座席を見ながら、私はいろんなことを考えました。

今まで、人に座席を譲って来たのはなぜなのか。それがマナーだからか？　ただそれだけの理由か？　相手がどう受けようが、そんなことは本当に関係ないのか？　例え譲っても、今のように申し出を受け入れてもらえなかったり、

嫌々座席に座られても、それでもいいのか？

座席のことにとどまらず、次から次へと、いろんなことが頭の中を駆け巡りました。

好むと好まざるとにかかわらず、誰だっていつかは人様のお世話になる日がやってくるはず。そんな時、常々「人の世話にはなりたくない」と思っている私が、素直に人様のお世話になれるのだろうか。

気付くと、いつの間にか電車は明石駅に止まっていました。見ると、先程の中年女性が降り際、席を譲ってくれた女子高生に向かって何かを話しています。「いいえ」と笑顔で答える女子高生。良かった。その笑顔を見て、私も何かつかえていたものが取れた気がしました。

そうだ、笑顔だ。今まで私が、疲れていても無理をしてでも席を譲ってきたのは、譲られた人の喜ぶ顔が見たかったんだ。その笑顔を見ることで、自分も助かっていたんだ。

たった一駅の間での出来事でしたが、私は大事なことを改めて教えられました。それは、一つの好意も、上手に受け止められてこそ、初めて好意となること。お世話になるのもまた同じで、受け方一つで、そこに助かりの世界が生まれたり、そうでなかったりするということを。

う～～ん、上手に受け止めたいなあ。

《先生のおはなし》

「運命を変える」

金光教サクラメント教会　大矢（おおや）　嘉（よみす）

私の奉仕する教会に不安な様子で若い女性が参拝されました。聞いてみますと、「占いの本を読んだのですが、運勢が悪い」と言うのです。そして、「先生のも調べてあげましょうか？」と言われます。私は、「調べなくていいです」とお断りしました。すると、「先生は占いは信じませんか？」と聞かれるので、「いえ、そんなことはありませんが、金光教を信心していますから、運勢は最悪でも大丈夫です」とお答えしました。

するとさらにその方は、「運命は変えられるのでしょうか？」とお尋ねになりました。お気の毒によほど悪い運勢が書いてあったのでしょう。

「はい、運命は変えられますよ」と言うと、女性は安心して笑顔になられたというような出来事がありました。

では、どうすれば運命を変えることが出来るのでしょうか。それは、「お礼を土台に」今を生きることです。

今から三十年ほど前、岡山県にある金光教本部で働いていた時のことです。当時金光教の教主であられた四代金光様から教えて頂いたの

は、日々の生活の中で、「お礼を土台に」生きることでした。これは、何をおいてもまず、お礼を申し上げるという稽古です。早速、実践を心掛けましたが、このお礼の稽古、実はなかなか難しいのです。ついつい、不平や不満、お願いが先になり、お礼を先に申し上げて、そのお礼を土台にしてお願い申し上げることになっていきません。

「難しいなあ」と思っていたある日、妹から電話が入りました。「母が明日、東京の専門医のところで手術する。細かい神経がたくさん通っているのどの辺りにメスを入れるので心配だ」と言うのです。

私はすぐに家族全員で母の元へ向かおうと思い、時刻表を調べました。何時の電車に乗れば、今日中に母に会える。よし、それならこの時間に出れば大丈夫と調べた上で、本部の神前にお参りしました。

金光様に事の次第を申し上げますと、金光様はいつもの「お礼」というお話を丁寧にされます。私としては時間が気になって仕方がない。「金光様、今日は時間がございませんから」と言いたいのですが、それも言えずにモジモジしていました。

それで、どうしてそう思えたのかは分かりませんが、「まあいいか、遅れても」と思ったのです。そう思った瞬間でした。金光様が、「今の心がええなあ」と仰せになったのです。「えっ」と言う私に金光様は、「比べてごらん。あなたがここに来て座った時と、今の心を」と仰

るのです。「あっ」と言う私に、金光様は、「来た時の心で行ったらお見舞いがお見舞いにならんじゃろうが」と仰せになる。そこでようやくその時の自分が見えてきました。

私は、母におかげを頂いてもらうことで頭が一杯で、平常心を全くなくして慌てふためいていたのです。そこには何事も神様にお任せして穏やかに信心する私がいません。これでは母を不安にさせるだけです。

そう思っておりますと、金光様はさらに、「何でそうなるか分かるか」と聞かれるのです。ポカンとして、「さあ」と答える私に、もう建物中響きわたるような大きな声で、「普段からお礼の稽古が出来とらんからじゃ」と一喝されたのです。その時のものすごい声は一生忘れることが出来ません。もうビックリしました。

そして、今度は穏やかな優しい口調で、「これから駅へ向かうじゃろうが。ええか。お礼申してな、『行かせて頂きます、ありがとうございます』。駅に無事着くじゃろうが。お礼申してな。『電車が来たら、電車が来ました、ありがとうございます』言うてな。乗るじゃろうが、『乗せて頂きましてありがとうございます…』」と、病院へ行くまでの道筋を順序立てて全部仰せになられて、その一つひとつにお礼、お礼、お礼、というふうに丁寧に教えて頂きました。

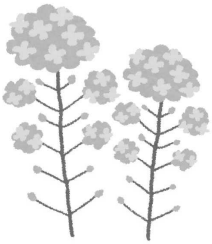
金光様のお言葉を頼りに、私は、時計や時刻表を見るのをやめ、教えられた通りにさせて頂きました。そうしましたら、私たちが駅の改札口へ行くと、電車がすっとホームへ入って来る。

岡山駅の新幹線ホームに上がった途端に車両がスーっと入って来て、その日のうちに病院に着いて母に会うことが出来ました。しかも手術は成功でした。

翌日、家に戻り真っ先に、本部の神前にお参りして、金光様に事の次第を報告させて頂きましたら、金光様はまた大きな声で、「ワッハッハッハー、そうじゃろ、そうじゃろ。信心はやってみんと分からんけえなぁ。それは結構でした」と仰せになられ、私も金光様に喜んで頂き、うれしく、ありがたく、「お礼を土台に」生きる信心の確かなことを実感しました。

このことがあってから私は、どんな時でも何はともあれ落ち着いて心に浮かぶお礼を自分にまず言い聞かせるようになりました。そしてそのお礼を土台に神様とお話をするのです。そうしますと視野が広がり、それまで見えていなかったものが目に入ってきたり、気付かなかったことに気付いたりします。そしていつの間にか、自分の心から心配や不安や恐れは消え去り、無理のない素直なお願いが出来るようになります。

人間の力ではどうにもならない運命。でも神様と一緒に生きることで少し違った道を歩むことが出来るのです。その少しの違いはやがて大きな違いになります。ですから、たとえ運勢が悪くても大丈夫。きっと運命は変わります。お礼を土台に今を生きてまいりましょう。



《先生のおはなし》

「足が痛い！」

金光教豊橋教会　安達吉浩

秋子さんは、現在九十歳を過ぎても教会への朝参りを欠かしたことのない、明るく元気なおばあさんです。

しかし、その秋子さんが十年ほど前のある時期、教会にお参りしても、「先生、毎晩毎晩がとてもつらいです」と泣き言ばかりが口をついて出てしまう、そんなつらい日々を送っていたことがありました。

そのころの秋子さんは、夜中に寝ていると突然両足の膝から下に痙攣が起こり、ビーンッ、ビーンッと足首から下が跳ね上がるように同じ動きを繰り返し、自分ではどうしようもない気持ちの悪い痛みに襲われていました。初めのうちは、痙攣もたまに起こる程度で、すぐに治まっていたので、あまり気にしないようにしていましたが、月日が経つにつれて、少しずつ起こる日が増えていきました。

病院へ行くのがあまり好きではない秋子さんも、やはり気になって病院で診察を受け、いろいろと検査をしましたが、医師からは、「その年では、何か体に故障が出てくるもんです。異常はありませんから、そのうち治まるでしょう」と言われ、根本的な原因は、分かりませんでした。

秋子さんは、「原因が分からないのなら、なおのこと神様に治して頂こう」と腹を決め、毎

晩寝る前に、「どうか神様、今日は痙攣が起こりませんように」とお願いしてから寝るようにしました。

ところが、夜中の二時ごろになると、「あっ！来たっ」と起こる前に目が覚めて、次の瞬間ビーンッ、ビーンッと痙攣が始まるのです。そして、治まってもなかなか寝付けないまま朝を迎えていました。

そして半年近くが経ちました。そのころには、ほぼ毎日痙攣が起こるようになり、日に日に秋子さんから笑顔が消えて行きました。寝不足のために顔も青白くなり、精神的にもどんどん落ち込んでいきました。教会でも、「今日は、痙攣が起きませんように。ゆっくり休ませて頂けますように」とお願いをされ、私も秋子さんを一生懸命励ましながら、一緒に神様にお願いをさせて頂きました。

しかし、なかなか痙攣は治まる気配がなく、それどころか徐々に痙攣の時間も長くなり、とうとう教会でも、「先生、こんなつらい日々が続くんでしたら、この年ですから、早く神様お迎えに来て下さいとお願いしたいです…」と口にするようになってしまい、いつもの元気な姿

は見る影もありませんでした。

それから数カ月経ったある夏の日、教会の毎月のお祭りに秋子さんが、珍しく一人でお参りされました。

いつも朝参りしている方と一緒に車で参拝されるので、「今日はお一人ですか？」と声を掛けると、「そうなんです。あの方が用事で参拝出来ないと言うから、一人で歩いてきました」と額の汗を拭いながら話されるので、「えっ！あの距離を一人で歩いて来たんですか？」と少し驚いて聞き返しました。秋子さんの家から教会まで約二キロもあります。「はい、そうです。途中の道が狭いので自転車や車が側を通りますからヒヤヒヤしました」と少し笑みをこぼしながら言われました。

「よく一人で歩いてこれたな。途中で何かあったら…」と思った瞬間、私は、ハッと気付かされ、すぐに、「秋子さん、痙攣が起こる時間は、いつも同じですか？」と尋ねました。「はい、だいたい夜中の二時ごろと決まってます」「じゃあ、その時間以外に痙攣が起こったことがありますか？」「いいえ、それは一度もありません。夜中に起こるから、寝れずにしんどいんです」。私はその言葉を聞いて、「秋子さん、もしかしたら、今まですごく神様に守られてきたんじゃないでしょうか」と言いますと、秋子さんは少し困惑した表情を浮かべました。続けて、「考えてみて下さい、今日ここまで歩いてくる途中、そんな狭い道で、もし痙攣が起こったらどうなってました？　命に関わるようなことも

あったかもしれません。もし昼間に痙攣が起こったら、怖くて家から一歩も出れなくなります。家の中でも不安です。でも、一度も痙攣が起こったことがない。それは、秋子さんを神様が守っているとしか思えませんよ」「そう言われれば、昼間にどんなに無理をしても、痙攣のことを心配したことがありません」。秋子さんもだんだん話が分かってきたのか、少し表情が変わってきました。

「秋子さん、長い間あなたのいうことをよく聞いてくれたその体に感謝することを、神様は教えて下さったんじゃないでしょうか」。秋子さんは、大きくうなずいて、「痙攣がつらいということばかり気にしていましたが、昼間元気なことをすっかり忘れていました」と反省しながらも何か一筋の光を見付けたような表情で話されました。

「今日から神様に痙攣がなくなるお願いよりも、両足をさすりながら、『いつもありがとうございます』とお礼を言って休むようにしましょう」。秋子さんは、「はい」と元気に返事をされました。

翌朝、教会に入って来るなり、「先生！　気付いたら朝でした。こんなにぐっすり寝たのは、ほんとに久しぶりです。ありがとうございます」と以前の明るい笑顔を取り戻していました。その日以来、秋子さんに痙攣が起こることは一度もなく、今も元気に教会へ朝参りを続けておられます。

目の前の体の痛みやつらさに、ついつい心を

奪われてしまう私たちですが、この秋子さんの体験を通して、今まで自分の無理をいつも聞いてくれた、この自分の体への感謝といたわりの気持ちをまず思い出せるような生き方になっていきたいと思います。

《先生のおはなし》

「感謝の拍手」

金光教名張教会　近藤佐枝子

一年ほど前、私が奉仕する教会にお参りしている亜沙美さんに、初期の胃がんが見付かり、手術をすることになりました。

彼女は最初、痛みを感じて病院に行き、がんが見付かったのですが、痛むほど進行していたわけではないのに痛みがあったことに、担当の先生が驚いたそうです。亜沙美さんは、「痛みというのは本当にありがたいです。痛みに感謝しないと」とおっしゃいました。

痛みはつらいことではありますが、病気を知らせてくれるメッセージだと思うと、痛みにさ

えも感謝をさせて頂きたいものだと思うのです。

その後、一年が経った先日の検診でも異常はなく、元気に過ごしておられるのはありがたいことです。

私がそんなふうに何事にも感謝を意識するようになったのには、訳があります。話は、私が金光教に出合う前の学生時代にさかのぼります。

私は当時、野外活動のクラブに入っていました。ブランコやシーソーなどの遊具作り、無人島でのキャンプ、自分たちで生きた鶏をさばいて食べたりと、大自然の中で様々な活動をし、色々なことを学びました。

いつもプログラムの最後には、先輩方から代々伝わる「感謝の拍手」という行事があります。この「感謝の拍手」とは、全員が目を閉じて、まずはその日に行ったプログラムを思い返す時間をたっぷりと取ります。次に司会者の進行の下(もと)、天地に、食物に、水に、道具に、行動を共にした仲間に、そして最後に自分自身に感謝の拍手を贈るというものです。

目を閉じているので、聞こえるのは、川や風、そして鳥の鳴き声など、自然の音だけです。自分と自然だけの世界になってくるからか、天地の中に自分が生きているということを実感出来てきます。すると、その日に起きた小さなトラブルや自分の負の感情などが、取るに足りない物のように思えて、心が浄化されていく感覚になります。

そんな時間をたっぷり取ってからの感謝の拍手です。疲れてヘトヘトになるはずの帰り道が、不思議と穏やかな気持ちになるのです。当時のあの感動は今でも、私の心に深く刻み込まれています。

その後、私はある男性と知り合いました。彼からは、人や物を大切にして、楽しんで生きている様子が伝わってきました。そして、「尊敬している人は両親」と、サラッと答えている彼に私は驚きました。何の照れもなく両親への感謝の気持ちを他人に伝えることが出来る人は、私の周りにはいなかったからです。それが私と金光教の出合いでした。というのも、彼は金光教の教会で生まれ育った人だったのです。やがて彼と結婚し、私は教会で生活をすることになりました。

教会の皆さんから教えて頂いたのは、信心はまず、「お礼から」ということでした。ですから私は「感謝の拍手」で感じた思いを大切にしながら、日々感謝の気持ちを持つことを心掛けていました。しかし、当時は、「あれもやらなきゃ、ちゃんとしなきゃ」という気持ちばかりが先走っていたような気がします。

そんな自分の姿をきちんと見つめることが出来るようになったのは、数年経ってからのことでした。それは、実家の父が、教会にお参りになっている方に謝っていたのを偶然に聞いたことがきっかけでした。信仰心の全くなかった父でしたが、大きなお祭りの時などは、教会に来て手伝いをしてくれていました。その時、こっ

そりと私の気の強さや心配りのなさを謝ってくれていたのです。

私は、口では、「感謝の心が大切だ」と言っておきながら、例えば掃除道具を片付け忘れたりなど、よく小さなことが抜け落ちていました。早く皆さんに受け入れてもらいたいと思っていたのでしょう。焦りからか空回りして、時にカリカリしたり、「私は頑張っている」という自己満足だけで、周囲への気配りも出来ず、いつしか感謝の気持ちを見失っていました。

父が私のために、そっと謝ってくれていたことを知り、そういうことをさせてしまった自分を反省し、改めて自分を振り返るきっかけとなりました。

それ以来、どんな時にでも、感謝の気持ちが持てるようにと、ありがたかったことだけを書く日記を付け始めました。最初は、一日三つと決めて、とにかく頭をひねりながら書き出すようなことでした。嫌なことがあった日などはなかなか思い付かなくて、三つ書くのに苦労した時もありました。

しかし、段々と書くことも増えていき、感謝は連鎖することを知りました。一つのことに感謝出来ると、それにつながる色々なことに感謝の気持ちが持てるようになりました。

「生活の全てが感謝の心に通じる」と実感し、しばらくして日記を書くことをやめました。ただし、稽古が必要だと感じます。余裕が無くなると、ついつい忘れてしまいがちの私です。これからもありがたいことを見付ける稽古を続け

ていきたいと願っています。

私は学生時代に「感謝の拍手」を通じて、金光教の信心の土台である「感謝する」ということの骨組みを作ってもらったように思います。そして、それに肉付けしていくのは日々の生活なのだと感じています。

教会の信心目標に「うれしく、たのしく、ありがたく」という一文があります。私はこの願いに沿って、これからも生活の中でもっとたくさんの「感謝の拍手」が贈れるようにと、「ありがとう」を探していきます。

《先生のおはなし》

「神様のつけた道」

金光教平野教会　宮下寿美

私たちの生活の中には、様々な思い掛けない出来事が起こります。誰でも、つらいこと悲しいことは避けたいものですが、そううまくはいきません。金光教の信心をしていても例外ではありません。

三年前の一月、妻が大阪市の無料子宮頸がんの検診を受けに行きました。病院へ迎えに行った私の車に乗り込んできた妻の顔は、どことなく曇り顔。「子宮頸がんは見付からなかったけれど、卵巣膿腫が見付かった」と言うのです。

卵巣膿腫とは、卵巣内に出来る腫瘍です。医師によると、右側の卵巣に十五センチ大の膿腫が出来ているという診断でした。大きくなった膿腫は、ねじれたり破れたりする危険が増すので、早く摘出手術をしなくてはなりません。しかし、手術は卵巣の機能に影響を及ぼす可能性があります。妻は、以前に同じ病気を患い、左側の卵巣の開腹手術を受けていたのです。今回が右側だとすると、これで左右両方の卵巣にメスが入ることになり、子どもを授かりたいと願っていた私たちにとっては、大変なショックでした。

私は妻に、「神様は私たちのために、このタイミングで病気を発見させて下さったのだから、神様にすがらせて頂いて、ここから道をつけて助けて頂けるようお願いしていこう」と話

し、教会に戻って二人そろって神様にお願いしました。この時から、毎日の祈りの内容が一つ増えることになりました。

後日、妻は、膿腫を詳しく調べるためにＭＲＩ検査を受けに行きました。すると、なんと膿腫があるのは、以前手術した方の卵巣だと言われたのです。そして、「内視鏡での手術のため、お腹の脂肪が邪魔になるので、ダイエットをして下さい」とのことでした。

私たちは、約二カ月先の三月十三日に決まった手術に向け準備を始めました。三月から四月は、教会では大きなお祭りをお仕えする忙しい時期です。術後の身体に障らないかがまた心配ですが、かと言って手術の日程を変更するわけにもいきません。無事に夫婦そろって乗り越えられるように、更にお願いの内容が増えていきました。

三月に入り、万全の注意をしていたのにもかかわらず、入院直前になって急に、妻が三十八度以上の発熱。入院予定日にも熱は引かず、とうとう手術は延期になってしまいました。薬や麻酔との関係で、発熱より一カ月間は手術は出来ないとのこと。しかも四月はもう手術の予定がいっぱいで、五月一日まで延期されたのです。

その間、お願いの内容は一つひとつと増え、減ることはありません。有難いことに、心配されていた膿腫がねじれるなどの緊急事態も起こらず、忙しい時期も無事に乗り越えられました。延期されたことで妻のダイエットも目標を達成出来、体調を万全に整えて手術に臨むことが出

来ました。

そうして手術も無事に終わり、お礼を申し上げたところ、なんと主治医から、「膿腫は以前手術した方ではありませんでした。大きくなった卵巣がお腹の中央に移動しており、見間違えていたのです。しかし、卵巣の機能を残すよう最善を尽くしましたから、心配はないと思います」と説明を受けました。私たち夫婦は、医師の言葉に驚くと共に、ホッと胸をなで下ろしました。

最初の診断のまま、正常な卵巣に膿腫が出来ていると聞かされて手術に臨んでいたら、どうだったでしょう。両方の卵巣がダメージを受ける。すると子どもは授からないかも知れない。その心配で妻の心は手術前に押し潰されてしまったかもしれません。神様は私たち夫婦が安心して手術に臨めるように、願っていた以上の道づけをして下さっていたことに初めて気付かされました。

手術から二日後、妻は無事に退院することが出来ました。摘出した部位の細胞検査の結果も良性でした。そして、その年の年末に、妻は妊娠し、翌年の夏に無事に出産しました。やんちゃな息子は、今では家族みんなの笑顔の元になっています。

金光教の教祖は**「何事もみな、神様の差し向け。びっくりと言うこともあるぞ」**とおっしゃいました。

生活上起こってくることは、自分にとって都合の良いことや悪いこと、好きなことや嫌なこと色々ありますが、その全てが、神様が私たちを良い方向に導こうと祈って下さっている中での出来事です。ですから、何事も神様が差し向けて下さったこととして受け止めることが大切だということです。

私たちにとっても、妻が卵巣膿腫になり手術をすることになったのは、まさしく「ビックリ」という試練でありましたが、出来事の順番が一つでも入れ替わったらどうだったでしょう。病気が分かる時期、手術のタイミング、膿腫の場所、そして妻の妊娠も、絶妙の順番で起こってきました。

もしも、妊娠した後で、卵巣膿腫が発見されたとしたら、それこそ大変なことになっていたわけですから。一つひとつをみると、難儀な出来事に見えますが、全体を通してみると、神様が付けて下さった道の上を、助かりに向かって進んでいたのです。

神様が、私たちを救い助けようと導いて下さるお働きの中で、生かされていると実感出来た経験は、私たち親子がこれから生活を送っていく上に掛け替えのないものとなったのです。

《先生のおはなし》

「あきらめないで」

金光教室積教会　河合久子

私は結婚を機に金光教にご縁を頂き、金光教の信心をするようになりました。現在は、教会長である夫と共に、教会で奉仕させて頂いております。

結婚前の学生時代のことですが、私は、幼なじみのA子と偶然地元の駅で再会しました。

A子は、当時、学校で幼児教育を学んでいて、その日は、幼稚園の先生になるための教育実習の初日で、これから実習先の幼稚園に向かうところでした。

「私、子どものころから幼稚園の先生になることが夢だったんだけど、もう少しでかなうんだよ」と教えてくれたA子の顔は、希望と喜びが満ちあふれていました。

A子は、子どものころからぽっちゃりとした体型で、よく男の子にからかわれていましたが、めげることもなく、とても優しく明るい子でした。また手先が器用で、彼女の図画工作の作品にはいつも見とれてしまうほどだったことを思い出し、幼稚園の先生は彼女にピッタリの職業だと思いました。

二人で通学中、「実習先の幼稚園で、子どもたちと仲良く出来るといいね」などと話をし、「また明日も同じ電車で一緒に通学しようね」と約束して別れました。

次の日、A子は、少し疲れた表情で元気がな

い様子でしたが、初めての実習で疲れているのだろうと思ってそっとしておきました。

そして、一緒に通学するようになって三日目、A子から思いもよらないことを聞かされました。「私、幼稚園の外遊びの時間に誰も一緒に遊んでくれる子どもがいないの。それに、体型のこともからかわれて…。他の実習生のところには子どもたちが集まっているのに、どうして私だけなの」と、すっかり落ち込んでしまっているA子に、掛ける言葉も見付からず、私もただ呆然としてしまいました。

けれども、私の心の中では、A子には自分の夢を諦めて欲しくないという思いが湧き上がってきました。それは、私自身も、子どもの時から将来なりたい職業があったのですが、残念ながら断念せざるを得ない現実に直面していたのでした。だから、あと少しで子どもの時からの夢をかなえることが出来るA子には、絶対に諦めずに頑張って欲しいと思ったからです。

しかし、A子は、翌日から私と同じ電車には乗ってこなくなりました。私は、A子が心配で毎日電車で通学している間中、他の時間も思い出す度に、「彼女が幼稚園で子どもたちと仲良く遊べますように、そして無事に教育実習を終えて幼稚園の先生になれますように」と願い続けていました。

それからも毎日、A子に会えることを期待しながら、私は、同じ電車に乗って通学していましたが、ある朝、駅に着くとA子が待っていました。その表情は、先日再会した時と同じよう

に明るく、教育実習がうまくいったんだなとすぐに分かりました。

でも、真っ先に教育実習の話は聞きにくく、私から話を言い出すのをためらっていると、A子から、「今日で教育実習が終わるの、心配掛けたけど何とか無事に済みそうだから知らせたくて」とうれしそうに話してくれました。私も思い切って一番気になっていた外遊びのことを聞いてみると、「しばらくは、誰も一緒に遊んでくれなかったんだけど、ある日突然、一人の女の子がそばに来て、『先生、一緒に遊ぼうよ』って、周りの目を気にせずに言ってきてくれて、それから女の子の友達も一緒になって外遊びをしたり、楽しく過ごせるようになったんだよ」とうれしそうに話してくれました。それを聞いて私も、自分のことのようにうれしくなりました。その後、A子が無事に幼稚園の先生になれたことも、自分の夢がかなったような幸せな気持ちになることが出来たのでした。

この時のことを考えてみますと、おそらくA子は、とかく外見をオーバーに表現する子どもたちの無邪気な言葉に、かつて体型をからかわれたトラウマが重なって心が萎縮してしまい、彼女の明るい良いところが発揮出来なくなってしまったのではないかと思います。

彼女自身、夢見ていた幼稚園の実習での思い掛けない展開に、本当は逃げ出したかったことと思います。それでもくじけずに頑張っているA子を見て、一人の女の子が勇気を出して声を掛けてくれ、A子も本来の明るさと元気を取り

戻すことが出来たのでしょう。

それはまさに、A子の子どもたちを大切に思う心、女の子のA子を思いやる心、それぞれが持っている「神様の心」が働いて下さった瞬間だったのではなかったのかと、その後、私は信心するようになって気付かされたのでした。そして、そこに私も祈りを通して関わらせて頂いたことが、本当にうれしくありがたいことだと思いました。

当時、特定の信仰を持っていなかった私ですが、本気で人の助かりを祈らせて頂いた初めての体験でもありました。

金光教には**「人間であったら、気の毒な者を見たり難儀な者の話を聞けば、かわいそうになあ、何とかしてあげたらと思うものである。神の心は、このかわいそうの一心である」**という教えがあります。

けれども私たちは日常生活において、ついこの神様の心を忘れてしまいがちです。皆が、そして私自身も、いつも神様の心でいられたら、こんなに幸せなことはないと思うのです。

《先生のおはなし》

「誰もがもっている神様の心」

金光教気仙沼教会　奥原美紀子

皆様、おはようございます。

私は、宮城県気仙沼市にある、金光教気仙沼教会で奉仕させて頂いています。

二〇一一年三月十一日の東日本大震災から、早くも四年が経とうとしています。全国の皆様方から、いや全世界の皆様方から様々な形でご支援を頂きました。また大勢の方々がボランティア活動においでになって、助けて下さいました。その活動は今なお続いております。被災地に住む一人として心からお礼申し上げます。

今、被災地は、震災当初のあの大混乱から落ち着きを取り戻し、避難所生活から仮設住宅へと移り住み、今では自分で土地を求め、家を建てて移り住む人、地方自治体が用意した一戸建て住宅、あるいは集合住宅に抽選で移り住んでいく人たちがだんだんと出てきています。しかし、大部分の人たちは相変わらず狭い仮設住宅

で肩寄せあって生活しているのが現状です。手足を伸ばして暮らせるような、みんなそういう暮らしが待ち遠しいのです。

教会が気仙沼地区での金光教のボランティア活動の拠点になっている関係で、いろいろなボランティア活動を体験したり、見聞きする機会が多くあります。その中で、ある一つのことに気付かされました。

私が大震災以前から個人的に関わりを持ってきた人たちで、家も、家財もことごとく無くなってしまった人たちが何人もおられます。あちこちの仮設住宅で生活をしながらお世話役もしています。

ある時、外で出会って立ち話をしていると、「仮設住宅のお世話役をしていると、みんなの前では愚痴も言えないのよネ」と言われるのです。なるほど、みんなの先頭に立って一所懸命にやっていると、人の前では愚痴も言えないんだな。でもどんな人でも、疲れてくるし、忙しくなってくれば、ため息もつけば、愚痴の一つも出てくるよな。そうだ。彼女たちのための集まりを作らせてもらおう。

そうして私は、何人かの人に声を掛けて、早速月一回の昼食会を始めることにしました。何をどれだけしゃべってもいい、十人から始まった気楽な昼食会です。みんな昔、乙女だったころを思い出して「乙女の会」と名付けました。

手作りの料理を持ち寄ったり、教会の台所で作ったりして、食べながら何でも話すという、楽しい集まりになりました。

津波の体験の話になりますと、涙を流しながら話し、涙を流しながら聞くという具合でした。みんな大変な体験を経て、今に至っているのです。海水にぬれながらご主人の手をしっかり握って離さなかったので助かった人。年老いた母と公民館の屋上に二晩寒さに震えながら、「もう駄目か、もう駄目か」と何度も思いながら、ヘリコプターに救助された人。よくぞ助かってくれたなあ、という思いで聞かせてもらいました。

ある時、金光教のボランティア活動が話題となりました。仮設住宅に行って餅つきをしますが、宮城県でも、岩手県でも餅文化の土地柄だけに、男の人も、女の人も出てきて餅つきに参加してくれます。にぎやかに掛け声も出てきます。

そんな話をしていると「乙女の会」の皆さんも、「私たちも参加してみたい」と言い出して、餅つきボランティアに加わることになりました。「乙女の会」の皆さんは被災者なのですから、何もしなくても、人のお世話を受けているだけで良さそうなものなのに、むしろ人が助かるお役に立つことで本人も元気が出てくるようです。不思議なものですね。

金光教の教祖は、信心するしないに関わらず

「神心」は生まれながらに、どういう人にも分け与えられていると教えています。被災した人々の話を聞いて、「かわいそうだな」「大変だろうな」と思える。また、「自分たちも餅つきのお手伝いをしたい」と思えるのは、まさに一人ひとりの心の奥にあった「神心」が現れ出したのだと思います。それが「乙女の会」の人々の元気のもとだったのです。

東日本大震災で二万人ほどが亡くなったり、数え切れない家屋や家財が流されてしまいました。あれほどの悲惨な状況の中で、みんながくじけてしまったかというと、そうではないのです。そんな困難を乗り越えようと一所懸命でした。それは、悲惨な状況の中にあっても、くじけない心を神様から分け与えられているからなのです。その「神心」が現れたのです。

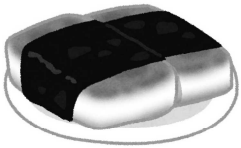
食べる物も、着る物も、みんな流されてしまいました。それでどうなったかというと、分かち合い、助け合ってしのいでいたのです。分け合い、助け合いの心が、どこからともなく湧き起こってきていたのです。震災当初は食べ物も飲み物も、本当に無かったのです。でも、小さいパンを分け合って食べたとか、水筒の水を回し飲みした話など、随分聞きました。着る物も分け合って寒さをしのいだといいます。自分さえ良ければいいと考えがちな風潮の中で、どうしてこういうことが出来るのでしょうか。不思議な話です。

家族を亡くし、家を無くし、仕事も無くしている中で、みんな哀れみ、慰めの言葉で励まし

合っていたのです。

「神心」というものは、生まれながらに分け与えられているというものの、めいめいの信仰によって、教えを頂き、祈る、願う、感謝の実践によって、更に更に大きく強く成長していくものであると思われます。

大震災の極限状態の中で「神心」は人を助け、自分を助け、共に助け合う働き合いを教えて下さったのだと思いました。



《先生のおはなし》

「父の匂いの中で」

金光教川西教会　平本光司

ふと懐かしく感じる匂いが、皆さんにはありますか？

雨上がりのアスファルトの匂い。浜辺の潮の匂い。桜並木を通る風の匂い。ずっと開けていなかったタンスの匂いなど。私は、父の匂いを感じると、二年前に亡くなった父の優しさに包まれてるような温もりを感じます。

私は今年で金光教の教師になり、二年が経ちます。教会で生まれ育ったのですが、父に全て任せて、手伝うこともせず自分の人生を謳歌していました。そんな中、父の病気が発覚しました。いつかは父の跡を継がなければならないとは思っていました。その「いつか」は遠い未来のことで、いざ、目の前にやって来ると、何の覚悟も準備も出来ていませんでした。

「余命宣告された父を喜ばせたい」。その一心で金光教の教師になる決意をし、一年間、岡山にある金光教本部での修行に入りました。神様のことなど、全く分かりません。

「どうか、父の病気を治して下さい」。毎日祈っても祈っても父の病気が快方に向かうことはありません。神様に祈っても何も変わらないのなら、ただの時間の無駄だと感じることばかりでした。そう思っている時、一通の手紙が父から届きました。その中にはこう書いてあったのです。

「起きてくることに一喜一憂するのではなく、起きている事柄をどのように料理するか、腕の見せどころと思って取り組むことが必要なようです。神様から与えられた材料をカレーにするのか、シチューにするのか、煮物にするのかは、こちらの心次第ですから、いかようにも料理出来ますね」

そして、この手紙はこう結んでありました。

「信心は喜びを見付ける稽古です。起きること全て命ありてのことですから、どう道を歩ませて頂けるのか楽しみでありますね」

私は、自分勝手な祈りの中で神様を見失っていたのです。すぐさま教主金光様の所にお参りに行きますと、金光様は、「今まで何事もなく御用されたことにまずお礼を申さなければいけませんよ」とお話し下さいました。目からうろこが落ちました。父が病気になってからは、お願いばかりで、お礼なんてしたことがありませんでした。

父は、「病気のおかげで、息子が教会の跡を継ぐ決心をしてくれた。そう考えると病気に感謝しないと駄目だ」と懸命に治療に当たりました。その姿を見て、私も毎日お礼をさせてもらう稽古、そして苦しい中から喜びを見つけ出す稽古を始めました。

ある時、父に、「私が修行から帰って来たら、ああしたい、こうしたい」と自分の思いを話したことがありました。その時、父は病室のベットに腰掛けて、笑いながら、「お前の思っていることがわしの思っていることや」。そう言っ

てくれました。

しかし、父の病状は悪化し、私が修行を終えて教会に帰ろうとする二カ月前に亡くなったのでした。「あと少し。どうか、それまでは…」。その願いもかないませんでした。

喜びを見付け出す稽古と言っても、そんな中で喜びなんて見付けられる訳がありません。父が亡くなったことに納得が出来ず、どこかで祈りなんて無力なものだと思ってしまい、なかなか稽古は進みません。

父の葬儀には、仲間の先生方はもちろんのこと、ご近所の人、友人、たくさんの方が来て下さいました。近所のお坊さんは、「私には祈ることしか出来ません。宗派は違いますが拝ませて頂けますか」と木魚を持って教会まで来て下さいました。ご近所の歯医者さんは、「最後に歯を奇麗にさせて下さい」と、教会まで来て、父の歯を診て下さいました。思いも寄らない、ありがたい光景だったのです。

その時、「人間、命の価値は長い短いではなく、どう生きるかが大事なんだぞ」。最後にそう教えられた気がしました。

そして、私は無事に修行を終え、教会に帰ってきました。何をどうしていいのか分からないことばかりの毎日です。誰かに相談することも出来ません。「父さえいてくれたら…」。その思いは日に日に募っていきました。

そんなある日、いつも通り朝のお祈りをしていました。何も変わらない、いつも通りの一日の始まりです。しかし、その日は違っていまし

た。お祈りを終え、その場を立ち去ろうとした時、どこからともなく父の匂いがしたのです。気のせいではなく、はっきりと。後ろを振り返り確かめましたが、誰もいません。次の日も、また同じ匂いがするのです。そんな日が四、五日続きました。

確かに父の匂いです。出掛ける時には、必ず付けていた父のお気に入りの香水のような匂いです。「ちょっと付けすぎじゃない？」って思う程、私はその匂いがあまり好きではありませんでした。その匂いが今、私を包み込んでくれているのです。

そしてその時、確信しました。人は死んで終わりではない。御霊様として、私たちを見守り一緒にいてくれているのだと。

悩んだ時、つらい時、いつも父の写真に向かって話をします。父は、「お前の思っていることが、わしの思っていることや」と、あの時のように笑顔で答えてくれている気がします。

私は父に抱かれて、日々教会で奉仕させて頂いています。父に恥じない生き方をしなければいけません。

その匂いは優しく、温かく、そして、時に厳しいものでもあります。穏やかにそよぐ春風のように、今日も、私を包み込んでくれているのです。

《先生のおはなし》

「娘の真心」

金光教中野教会　河井真弓

娘の久世が、幼稚園の年長の時の話です。久世は、三歳の時から金光教の教会のお祭りに奉納する舞の稽古をしていました。この舞は、吉備舞といって、明治の初めに、雅楽をベースに生まれた音楽に舞を付けたものです。平安時代をほうふつとさせる美しい衣とはかまを付けて舞います。久世も、お参りをしている教会のお祭りで、ぜひとも舞いたいという思いから、吉備舞の稽古を始めることになりました。

ちょうどその頃、教会が出来て八十年を祝うお祭りが行われ、そのお祭りが娘の初舞台となりました。始めた当初、指導の先生からは、「神様の前で舞えるまでになるには、お稽古をたくさんしなければならないので、今度のお祭りに舞うのは難しいかもしれないね」と言われていました。にもかかわらず、お祭りの当日には、見事に舞うことが出来たのです。五歳の女の子が一生懸命神様に向かって舞う姿は、お祭りに集まった多くの人々の心を打つことになりました。たった三分の舞を舞うために重ねた稽古の成果であることは、言うまでもありませんが、一番は、子ども心に、「神様に吉備舞を見てもらいたい」という思いが舞を通して現れていたからでしょう。

その後も、娘は黙々と吉備舞の稽古を続けていましたが、ある日、金光教のご本部で舞って

欲しいという話が来たのです。娘に確認すると、「ぜひ舞いたい」とのことで、すぐにお受けする返事をさせて頂きました。しかし、しばらくしてあることに気付いたのです。それは、吉備舞を舞うことになっている日は、娘の幼稚園の発表会の日だったのです。ちょうど、この時期に、一年に一度、年少から年長までの園児らが、一年間の学びの成果を発表する意味を込めて、歌や劇、楽器演奏などを披露するのです。

年少、年中、年長と成長する子どもたちの姿を見るのは、親として楽しみでもあり、心が温かくなるものです。しかも、年長ともなれば、最後の舞台で、親も我が子が何の役をさせてもらえるのかと、気をもむものです。ですから、その発表会に出ないという選択は、私の中にはありませんでした。

娘に、吉備舞を舞う日と、幼稚園のお遊戯会が同じ日であることを告げると、娘は躊躇(ちゅうちょ)なく、「ひさちゃんは、吉備舞を舞う」と言ったのです。「えっ！　本当？」と娘の言葉に驚きました。次に私の口からは、「本当にそれでいいの？」と、幼稚園を選択するように促す言葉が出ていました。娘は、「それでいいの。幼稚園でのお遊戯会の練習は一生懸命するから」とのことでした。

その後、お遊戯会では、楽器演奏と桃太郎の劇をすることが決まり、本格的な練習が始まりました。それと共に、幼稚園から帰れば、吉備舞の練習が待っているという毎日でした。そして、あっという間に本番前日がやってきたので

す。

教会の親しい方々の中での舞と、ご本部での見ず知らずの方々の中での舞とでは、大人の私が考えただけでも緊張のあまり足がすくんでしまいます。

また、天気予報で、東京を始め、金光教の本部がある岡山に大雪の警報が出ていました。そこで、当日には雪で新幹線が動かない可能性があるため、急きょ、前日に東京を出発することにしました。岡山の金光教本部に着いたころから、雪がチラチラと舞い始め、時間を増すごとにだんだんと強く降ってきました。すると、私の携帯電話に夫から電話が掛かってきたのです。

用件は、東京が大雪で、近年にない積雪なので、幼稚園の先生から明日のお遊戯会を中止し、翌日に変更になったということと、それなら久世ちゃんも参加出来るので先生も喜んで下さっているということでした。

お遊戯会の日が変更になるなんて、想像も出来なかったことでした。ですから、その喜びは私も娘も言葉に出来ないものでした。久世に報告し、肩を抱き合って喜びました。久世は、「神様は本当に凄いね」とつぶやきました。

予報通り、本番の日の朝には銀世界になっていました。そんな中にあっても、全国から多くの方々がお参りに訪れ、お祭りも無事に仕えられ、久世も吉備舞を奉納することが出来ました。久世が舞っている姿を通して、全ての事柄に神様の後押しを感じました。

翌日、幼稚園のお遊戯会の朝、同じクラスのお母さん方が、私の所に駆け寄ってきてこう言うのです。「久世ちゃんは凄いね」「大変運がいいね」と。

更に、園長先生が開会のあいさつで、「幼稚園の長い歴史の中でお遊戯会の日程が変更になったのは初めてです」と言われました。私は心の中で、神様にお供えしたいという久世の真心を神様は受け取って下さったのかなあと思いました。

久世の真心で、一生懸命に取り組んだ吉備舞とお遊戯の二つが成就した、その見事さに、神様のありがたさを更に深く感じました。久世一人のために神様がそのようにして下さったとは思いませんが、迷うことのない神様への純真な真心を、何よりも神様はお喜びになるのだと思わされた出来事でした。

金光教本部　ラジオ放送係

住 所　〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷３２０

電 話　０８６５-４２-６４５３

FAX　０８６５-４２-２１１４

メール　w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

北海道放送	土曜日 あさ5時10分
東北放送	日曜日 あさ5時00分
ニッポン放送	日曜日 あさ4時30分
東海ラジオ放送	金曜日 あさ5時25分
和歌山放送	日曜日 あさ6時50分
朝日放送	水曜日 あさ4時50分
山陽放送	日曜日 あさ6時35分
中国放送	土曜日 あさ5時50分
南海放送	日曜日 あさ6時00分
RKB毎日放送	日曜日 あさ6時50分
宮崎放送	日曜日 あさ7時10分

こころで聴くおはなし 検索